

文化高知

2004年9月 NO.121



「神戸の二人」 山本啓三

〈もくじ〉

龍馬の生まれたまち記念館……………	西谷 進	2
谷間の里山……………	宮脇 修	3
気になる女性たち……………	大木基子	4～5
人は 皆 こうしたもの……………	武中淳彦	6～7
コミュニティシネマを作りたい。……………	有光文平	8～9
アイルランド音楽に魅せられて……………	北村 剛	10～11
私が惚れた土佐人－横村 浩－……………	金 英丸	12
かるぼーと7月の事業のご報告……………		13
風俗歳時記・風伯……………		14～15

(財) 高知市文化振興事業団

龍馬の生まれたまち記念館

西谷 進

平成十六年三月二十一日、高知市上町の坂本龍馬の誕生地近くに「龍馬の生まれたまち記念館」が開館しました。「龍馬の生まれたまち記念館」、この名称は、単に坂本龍馬の誕生地にある記念館という意味だけではなく、「まち」がキーワードになっています。

坂本龍馬と言えば、好きな歴史上の人物ランキングでも常に上位にあげられ、全国にも多くのファンがいる、言わずと知れた幕末最高のヒーローです。

例えば京都の町を歩いてみると、さすがに古い建物が残っている場所は少なく、碑が立っているだけのところが多いものの、路地の陰や木戸の裏から今にも龍馬の声や足音が聞こえてきそうな、そんな歴史的な雰囲気を感じることが出来ます。一方、龍馬誕生地である高知市上町。電車

や車が行き交う通り沿いに誕生地を示す碑が立っているものの、付近はビルやマンションが建ち並び、当時の面影は全く残っていません。訪れる観光客や龍馬ファンの人々からは、龍馬をしのび感じられる施設がでないものかという声が多く寄せられています。

龍馬は城下でも屈指の豪商「才谷屋」を本家にもつ郷土の家に生まれています。生家の見取り図等は見つかっておらず、さまざまな史料を集め研究を重ねても、生家の再現については想像の域を越えることはできませんでした。その点については郷土の歴史家の人々からもご意見をいただき、最終的には生家の復元や再現ではなく、龍馬の生まれた「まちの記念館」として、また、地元の方々の交流の場として、土佐

漆喰に日本瓦で、上町にかつてあったであろう「造り酒屋」の蔵をイメージして建設されました(建物は平成十六年度木材利用推進協議会会長賞を受賞しました)。

坂本龍馬に関する書籍は数多く出版され、幕末の日本において彼の果たした役割については、さまざまな角度から検証されています。特に土佐を脱藩し全国を駆け回って活躍した事柄は多くのページをさいて紹介



されています。しかしながら、龍馬の幼年期・少年期については、さほど詳しくは紹介されていません。桂浜にある「高知県立坂本龍馬記念館」では龍馬の手紙を中心に史料を展示

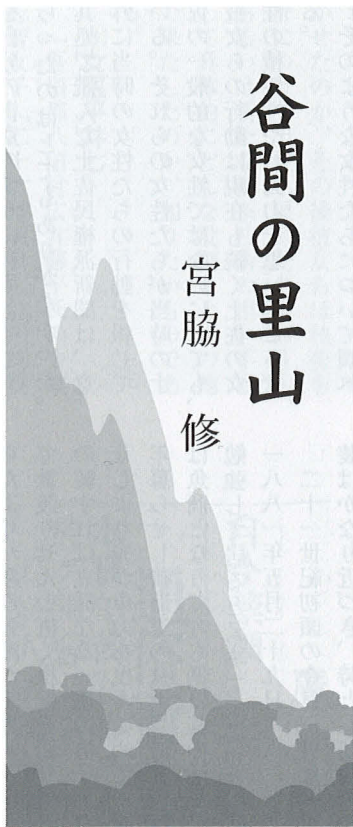
し顕彰していますが、「龍馬の生まれたまち記念館」では映像や音声を使って坂本龍馬という人間形成にかかわった「家族」や「まち」「友人」を紹介しています。また、地元の小学校の子どもたちには展示演出の音声に出演していただいたり、建設前から総合学習の授業に向き、龍馬が生まれたころのまちの様子や建物の建設経過などを説明したりして、積極的に関わってもらっています。

「龍馬の生まれたまち記念館」には現在学芸員を配置していません。この施設は「博物館」なのか、それとも「ミュージアム」なのか、それとも「観光施設」なのか。来館された方のアンケートを見ると、「音声や映像で分かりやすく紹介され、楽しく拝見しました」という声が多く聞かれる一方、「もっと歴史の本物の史料を充実させよ」と博物館的なものを望む声もあります。要するに訪れる方が何を期待して来るかによってその評価が分かれます。いずれにしても、高知市の新たな観光拠点として、また人々の交流の拠点として大きな役割を果たすとともに、多くの方に訪れていただき末永く愛される施設となることを願っています。

にしたにすすむ／高知市立龍馬の生まれたまち記念館館長

谷間の里山

宮脇 修



昨年、南国市の谷間にある里山を譲っていただきましたので、その里山を老人の遊び場にできないか?と考えたりしています。先の持ち主は、二十年ほど趣味として里山に文旦や梅などの果樹を栽培されてこられましたので、四季の果物の恩恵に浴しています。

南に面した北側の斜面にも段段畑があります。果樹なども植えられておらず草ぼうぼうの荒れたままになっていて、そこに野菜などを植えたいと企んではいますが、まだ実現はしていません。

谷間の山の斜面に段段畑を造ること、機器類の発達した現代でも大変な能力が要求されますが、それが何十年、いや何百年もの昔に造られたのですから驚かされます。おそらく下の畑から造っていったのでしようが、一抱えもあるような大きな石

を積み上げて棚田にするのですから、どこから石たちを運んできたのかも調べてはいますが、おそらく川の石を荷車に積んで運んだものでしょう。

長い谷間を運ぶのも大変ですが、その石たちを山の斜面に担ぎ上げて積み上げる作業も大変な根気のいる仕事だと思われれます。おそらく父から子、そして孫へと何代にもわたって受け継がれて出来上がったのではないのでしょうか? その段段畑を見上げていますと、昔の里人の声が聞こえてくるようです。

里山には杉や檜の造林もあり、また孟宗竹の林もあって、なにを創ろうと思いつてもたちどころに整います。谷間には小さいながらも谷川も斜面を下っていて、現在はその水を引いてアマゴの自然養殖もしています。

現在、その里山を管理してくれています従姉妹は、初老のご婦人たちに手伝ってもらって、その里山にサツマ芋や野菜を植えたり、鶏を飼ったりと忙しく、また楽しく自然を相手に遊んでいます。

将来わたしは、その谷間の里山を、老人の遊び場にできないだろうか?と考えたりしています。アマゴの養殖だけでなく、綺麗な水のワサビ田なども出来るでしょうし、孟宗竹の竹炭なども生産できそうです。仕事と思えばしんどいでしょうが、遊びと考えれば子どもの心で楽しめそう

にも思えます。

喧騒の大阪から、その里山に二、三日暮らしますと、大袈裟な表現かもしれませんが、人間蘇生と申しますか、自然の精気を吸って生き返るような思いがいたします。昔の人たちが築いてくださった里山を、小さいながらも大人の遊び場に出来たら……その時は、わたしも土佐の老人として、自然相手に遊びに熱中する時かもしれません。

みやわきおさむ／(株)海洋堂代表取締役



気になる女性たち

大木基子

「気になる女性たち」と言っても、車内で人目もはばからず鏡を出して化粧したり、床にべったり座り込んでケータイをいじっている女子高生たちではない。今から百年も前の新聞に載っていた土佐の女性たちである。

私は昨年三月、高知短大を辞めると同時に住み慣れた高知を離れた。離れる前の数年間、自由民権記念館を自分の書齋のように利用させてもらったのはとてもありがたかった。其処で読んだ土佐民権派新聞は、意外に当時の女性たちの行動を報じている。それらの女性たちが当時の土佐の一般的な女性ではないにしても、彼女らの行動は現在も続く土佐の女性の積極性や行動力を思い起こさせる。

そのような女性たちについて調べ

たいと思いつながら、手がかりすらつかめないまま私は高知を離れてしまいい、今に至るも気になってならない。以下のような「気になる女性」の幾人かについて記してみよう。

(1) 異装の女性

吾川郡長浜村宇賀に住むお直という二十八歳の女性は、十七歳で結婚するがまもなく離縁となった。そして「軟弱なる婦女となりて一生を畢らんよりハ寧ろ強剛なる男子となりて世渡りせんと直く様髪を切り男子の装すれば立派なる一個の男子となりしより先づ車力を曳き始めて一兩年暮らせし後旧里の長浜に帰り今度は魚商となりて今も猶ほ其の活業に勉強して居ると云ふ」(『高知新聞』一八八一年五月二十九日)。

二十世紀初頭の今日、男女の服装はかなり近づき、時として後姿か

らでは男性か女性か区別できないことがある。だがそれはオフの場合であって、ダークスーツにネクタイというのは真夏であつてもサラリーマンの制服そのものである。その限りでは今なお男女の装いには明らかな違いがあると云つてよい。人の思想や行動が着る物に多少とも制約を受けるなら、「お直」は男装することによって、当時の世間一般が女性に与えてきた生き方を否定したと言えよう。いや、それまでの女性の生き方——彼女の言い方に従えば「軟弱なる婦女」——を否定するためには、男装せざるをえなかったのではないか、彼女自身の内にあつても、周りの目からしても。

この記事より一年前、県が高知女子師範学校生徒の袴着用を禁止した(『高知新聞』一八八〇年七月十二日)のも、この文脈から考えると容易に理解できよう。袴という男性用衣装を許すことによつて、女生徒たちに「女らしさ」を失わせてはならないと考へたのである。資本を持たず、家族もなく、女性を売物にしようとしなかった「お直」は、人力車曳きや魚屋というきわめて男性っぽい職業を選んだ。彼女がいつまでそれを続け、どんな生活をしたのか、また周りの人々はどうな対応をしたのか、

気になることである。

(2) 土佐を離れる伝習工女たち

「土佐郡布師田村山本千輔女まさ(18)は兼て製糸業に熱心し屢々伝習の事を父に請ひたれとも許されざるうち先頃同郡野村の何某方に嫁入りせしも何分決心せしものと見え四五日前密かに家を脱け出し西京に旅行せしとぞ」(『土陽新聞』一八八八年九月一日)。反民権派の『高知日報』同年十月二十五日は、より詳しく彼女が自分の衣装を売つたりして旅費を作つたことや、京都の製糸場には満員で入れず、やつと滋賀県近江製糸会社へ入社が決まったと伝えている。

一九六〇年代前半まで高知県の山間部では養蚕が盛んに行われ、いくつかの製糸工場もあつた。一八八〇年代後半から、県内に製糸工場が作られたり製糸技術を学ぶ女性たちの記事が急に増えている。手繰りに代わる新たな機械製糸技術を身につけようと、自分の衣装を売つてまで旅費を作り家出した山本まさ(あるいはまさ尾)は特別としても、群馬県の富岡製糸場や大渡製糸場、滋賀県の近江製糸場や山中製糸場などへ、この当時少なからぬ土佐の女性たちが行つている。いったい何が彼女らをつき動かし、土佐の地をはるか離

れた所まで技術を身につけるべく行かせたのか、その後彼女らは技術を身につけて土佐へ戻つたのだろうか、あるいは新たな製糸技術の担い手として具体的にどんな役割を土佐の地で果たしたのか、知りたいものである。

(3) 女医平井七

「吾川郡八田村広井藤平氏の令嬢志智女子「二十」は頃日仁淀川架橋発起人となりて同村役所へまで出願せられたり(後略、引用者)」(『土陽新聞』一八八二年十一月八日)。これが平井七の名が当時の新聞に出た最初のものである。反民権派の『高陽新報』によれば「高岡郡高岡村」在住で「十二歳の此より医学を修め頃日にいたりてハ余程その道に達し其辺の評判者」で、仁淀川架橋の書面を県にも提出している(『高陽新報』一八八二年十一月三十日)。このように彼女は漢方医として技術を身につけ、近在の人々の信頼を集めていたらしい。彼女の名は、通俗衛生演説会で富永らく——県内初の内務省免許助産婦で民権運動にもかかわつた——とともに演説したこと

から、自由民権運動史上では以前から知られてはいた。しかしそれだけのことにはすぎなかつた。当時の新聞によれば、彼女は西洋医のみならず

廣 告

自今禁酒 稻垣益穂

通俗衛生演説會

本日午後六時ヨリ 町堀詰座ニ於テ開會

世何人ヲ論セズ入聴ヲ許ス

辨論員 山董 濱田耕吉 竹村繁太郎
十町田且龍 濱田謙三 大石恒久
藤村景樓 平井七女 富永樂女

右廉價を以販賣致候間多少に不拘御購求之程奉希儀也

いよいよ石灰

西孕 小笠原石灰所

新市橋東詰 全支店

上方製 澤の鶴

同 釵 菱

右ハ廉價ヲ以差上可申候間多少に不拘御註文被下候ハ市街ハ早速持參可仕候ヲ付倍書御註文ノ程奉冀上儀

種崎町 櫻木酒肆 敬白

生儀今般左ノ所ニ於テ 醫師 前田壯碩 開業ス

高岡郡高岡村町組二百五十六番地

洋馳馬具并馬具 新荷

水石輪・洗滌刷毛・毛燒器・金櫛毛櫛

伏祈御愛求高知本丁二丁目 神田屋馬具店

明治19年(1886年)6月19日の土陽新聞に掲載された通俗衛生演説会の広告。弁士として平井七、富永楽(らく)の名がある。

漢方医も含めた衛生大懇親会や新年祝宴会の発起人となつたり、のちに吾川郡連合衛生会の幹事に選ばれている(『高陽新報』一八八七年十一月十三日)。

野中婉があまりにも有名であるが、平井七も男性が圧倒的に多い漢方医

の中でそれなりの地位を占め、地域と関わる姿勢を持っていたと思われる。彼女が自由民権運動のうねりやどうとらえ、西洋医学が主流となる中で漢方医であることをどう考え、どのように対応しつつ女性であることとを考へたのか(あるいは無関心だったのか)、これまた気になること

人は皆 こうした者の

— モーツァルト賛・バーデン市立劇場来高に寄せて —

武中淳彦



プロローグ

はちきんの国土佐で初の「コジ・ファン・トゥッテ」本格的公演…何とも痛快な事ではある。

我が国では余り知られていないが「コジ…」は、本場の歌劇場で「後宮からの誘拐」と並び最も頻繁に上演されるモーツァルト歌劇古典中の古典。しかし、現在フランス有力紙の紙名にもなっている「フィガロ」(の結婚)——ポーマルシエの劇による。往時は発禁本——や、「オペラの中のオペラ」と称される「ドン・ジョヴァンニ」と同じくL・ダ・ポンテ台本によるその物語は、「愛の不在を実証する」と云った不謹慎極まりない、皮肉に満ちた喜劇。

一見口あたりの良い、美しく流麗なその音楽はモーツァルトそのものであるが、華やかな「プリマドンナオペラ」※とは対照的に、個性に富む男女六名の「主役達」が徹底してアンサンブルの妙をきかせる「歌の室内楽」であり、共に喜び共に謳う合唱・管弦楽とあいまつての饗宴は、彼の交響曲・協奏曲他とも内容的に通ずるモーツァルト後期を代表するもの。その溢れる歌心は「はじめの」リスナーや「歌好き」の人を虜にするばかりで無く、永年「聴きこんで」来られた愛好家・「通」の方々をも「唸らせる」逸品である。

I 貴族社会を嗤い飛ばす「毒」

封建制度黄昏の時代、革命前夜のヨーロッパに生き、華やかな宮廷文化の寵児としてもはやされた天才モーツァルトも、上流サロンに在った時には「使用人」の通用口から出入りしたと云われている。そんな現実の中。此の三つのダ・ポンテ作品では、貴族社会に一貫して「牙を剥いて」いる。

唯一の歌劇「フィデリオ」で、らかに理想主義を掲げたベートーヴェン以前にあつて、彼は非情なりアリズムで「上流」の墮落ぶりを告発する。しかも、ギャラント様式の優美さを決して喪わず、「美の法則」に則り、高雅な精神、極めて洗練された手法ですべてを歌い飛ばしている。

その凄まじい「毒」は、十八、十九世紀の教養人・意識の高い人々の理解を遙かに越え、二十世紀そして現代の私達に直接訴えるメッセイジ。

II 明るく朗らかな人間賛歌

ここで彼は「モラル」を問うてはいない。

独りよがりな思い込み、固定化した常識に囚われ、ちっほけな見栄、型」であつたスタイルを借り彼が実現化した「(個)の共和制」とも云うべき今後の人間社会の在り方、その理想像の典型を垣間見させてくれる。

モーツァルト晩年の器楽、ピアノやクラリネットの協奏曲、交響曲や弦楽五重奏曲等に代表される傑作は今日、我が国でも大変なポピュラリティーを博し、愛聴されている。そこには、天上に昇る美しさや澄み切った世界があり、多様性の中に深さと寛さがあつて「すべて」が在るようだ。

しかし、これらの歌劇に於いて彼はわざわざ制限のある、そして亦大変せち辛い日常の言葉、何気ない会話…そういったものを巧みに取り込み乍ら、集約された社会の幾コマかを、驚くべき洞察力、卓越した心理描写を駆使し鮮やかに物語っている。そこには上述の名曲に決して語らなかつたもの——つまり「人間の劇」が生きて描き出されている。先程述べた皮肉な喜劇の中で六人の男女達はしかし何と屈託がなく澁刺と踊つていて瑞々しいのだろう！ここには「人間」が確かに存在し語りかけてくる…あたかも天才モーツァルトの肉声のように。

楽都ヴィーンの郊外バーデンは、

極めて通俗的な諸々にふりまわされる愚かさを終始嗤い飛ばす彼。

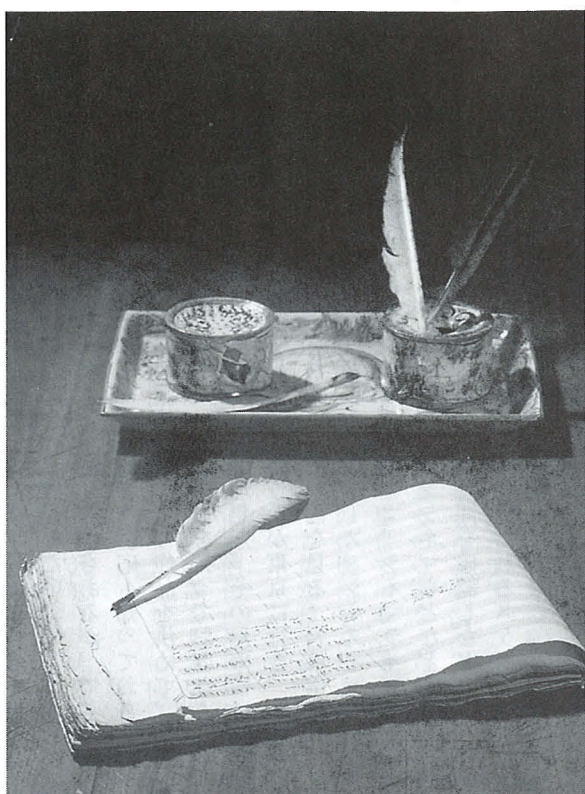
「建て前」と「キレイ事」に「大言壮語」「美辞麗句」、そして「偽り」の構造を次から次へと裸にしてみせる。

楽の欲び、調和と響きの理知的な力とそれとは解らない程鮮やかにしつらえて…整然と並ぶ様は、これらの「戯れ」もすべて「宇宙構成のほんの一部にすぎない」と云う事をさり気なく教えてくれる。

人間とはどれほどのものか？ 突きつめた所で裸のそれは、いかに小



ジュピター交響曲の自筆譜



レクイエムの自筆譜

さく、はかなく、そして脆く頼りないものか?! 彼は、問うてきているのだ。市井の声、真実に訊く誠実な魂の代弁者として…。人は今日を生き明日につなぐ中、歌をうたい、軽やかなステップを踏み、楽に興じる事で、どんな時にも決して「気高い魂」を失わず、前向きにそしてどっこいしぶとく生き抜いてゆける。そんな肯定的な、明るく朗らかな人間賛歌。予定調和的な天才からのエール：そんな風に僕には思えてならない。

戦後の時代、ヴィーンの歌劇場は名匠K・ベーム他の許、銘々歌ごころに溢れ、(個)のしつかりした芸達者な歌手陣を核に、更にウィーン・フィルの名手達の加わった「黄金のアンサンブル」によってモーツァルト歌劇の演奏史に新たな伝統を打ち立てたのだが、遺された録音にきくそれは創意に溢れ美しいものであると同時に、十八世紀喜劇の「定

「ヴィーンの森」の懐に在りモーツァルトが「アヴェ・ヴェルム」の、そしてベートーヴェンが「第九」の靈感を得た所と云われ、シューベルトやJ・シュトラウスも活躍した田園の瀟洒な町である。この劇場の初の当地での「引越越し公演」に選ばれたのが「コジ…」。伝統と歴史に培われた劇場文化、そのローカルな味、歌声と演奏に生で触れる絶好の機会であり、等身大のモーツァルトの肉声に耳を傾けるひと、き心に躍らせている。

歌劇「コジ…」は大変ポピュラーな古典だが、永らくその一見「陳腐な内容」の為に隠れた真価が看過されてきた作品でもある。モーツァルトの「肉声」を探しに出かけてみませんか？

たけなかつひこ / 作曲家・弦楽器奏者・指揮者・JFC(社)日本作曲家協議会会員・AFJA M日仏音楽友の会名誉会員・SCKスコラカントルム高知主宰

※プリマドンナオペラ：文字通りたつた一人の主役に全面的にスポットライトを当て、その歌唱やドラマ性に重点を集約した(主に悲劇)オペラ。「蝶々夫人」「アイーダ」「ノルマ」「エレクトラ」など。

★9月18日(土)午後6時30分から、茶房リベルテ(高知市本町1丁目5-24)で第1158回レコードコンサート「コジファン・トゥッテの時代〜エクセレント・モーツァルトI」を開催します。ドリンク代のみで、どなたでも参加できます。詳しくはリベルテ(電話088-823-8062)へ。

■シネマLTGという自主上映を始めて十七年になった。当時相棒と僕は二十代後半、フランス・ヌーヴェルヴァーグに傾倒していて、都会のようにもっとたくさんのフランス映画が見たい。そんな思いで、ルルーシュ、トリフォール、ゴダールという「名」の小さな上映会を結成した。個人的すぎて観客から相手にされないような時期もあったが、それも若気の至り、気軽な趣味の延長のような上映会はしばらく続いた。

三十代に入って相棒が仕事の関係で上映会に関われなくなったのを機に、二人の新しい仲間が加わってくれた。二人の加入の影響は大きく、それまでのフランス映画一辺倒からアジア映画を含む世界の映画の素晴らしさに目を向けさせてくれた。作品の視野が広がれば活動の視野も徐々に広がる。さらに新しい仲間や応援してくれる仲間も増えた。途中赤字に息切れしたり、まわり道したりしながら仲間とともに上映会を切り盛りし、気がつけば四十年代半ば。よくも続いたものだと思ながら感じるとともに、これからの僕たちのあり方を考え始めた。さてシネマLTGをどうしていこうか…と。

■自分たちが上映したいと思う作品

ブや講演会・ライブもできる。

既存の映画館でもない、シネコンでもない、面白くて居心地のよい、自分たちの街の映画館にしたい。そしてその場所は、中心商店街の中がいい。バスや電車を利用して、どこもからお年寄りまで安心して来られる場所がいい…。

そんな思いを募らせて、つてを頼りに中心商店街へ相談を持ちかけた。高知県中小企業団体中央会の紹介で商店街組合の役員の方に会い、高知版コミュニティシネマの可能性について相談した（とは言っても、勝手な話でお金も組織もまだできていないのだが…）。それは面白い、中心商店街の活性化のためにコミュニティシネマは必要です。ぜひ実現してほしいので協力します」と励まされた。

■映画をキーワードにした街づくり。やりたいことはあふれるほどある。いろんなビジョンを描きながら、九月に大阪で行われた、「映画上映ネットワーク会議二〇〇三（イン大阪）」に参加した。映画上映に関わる人が集まり、共通の課題を話し合い、情報交換を行う。まるで「映画の団体」だ。テーマは「コミュニティシネマ」。「金沢での映画による街づくり」、「深谷での商店街空き店

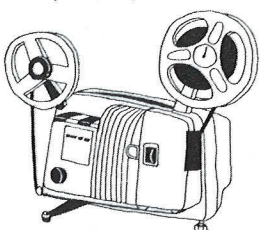
は、まず実際に自分の目で見て内容を確かめたい。サンプルのビデオを借りる手もあるが、できれば会場の観客の反応も知っておきたい。納得した上で作品を決めて、上映当日には自信を持ってお客さんを迎えるのが理想だ。そのためには仲間のうちの誰かが東京に行き、ミニシアターで映画を見る。岩波ホール、ユーロスペース、シネスイッチ銀座、ル・シネマ、シネマライズ、恵比寿ガーデンシネマなど…上映会場と上映時間を確認しながら、一日で効率よく見られるスケジュールを考える。同時に、なんで高知にミニシアターがないのだろう？ 自主上映がこんなに盛んな街で、どうしてできないんだらう？ どうすれば作れるんだらう？ と思う。

■二〇〇三年の年明け早々のことだ

コミュニティシネマを 作りたい。

〜僕たちの活動の
これまでとこれから〜

有光文平



舗での映画館」など、各地のコミュニティシネマの具体例を知ることができた。

一緒に参加した高知県文化財団の藤田さんの計らいで人脈も広がり、出会った人たちに高知の動きを伝える会話の中で、さまざまなアドバイスをもらい大いに勇気づけられた。「よそのことをうらやましく思っている場合ではないぞ！ この熱気を高知の仲間にも早く伝えて何とかせねば…」と気がはやる日々。

■中心商店街の振興策に力を入れていく市長と話をしたい。そう思っていたら、チャンスは向こうからやってきた。

「西原理恵子さんに会わせてほしい」と、二〇〇三年九月のシネマLTG開催の「ぼくんち！上映会&サ

った。高知県立美術館ホールで、トヨタアートマネジメント講座「シネママネジメントの挑戦・公共的な映画事業を立ち上げよう！」が開催されることになり、シネマLTGに実行委員会に入るよう要請があった。全国の映画上映を巡るさまざまな動きや、公共的な映画事業について講師陣の話や、絶好の機会を得て、これからの僕たちの活動がさまざまな可能性を秘めたものであることを知った。初めて「コミュニティシネマ」という形（言葉）を知ったのもその時だ。

講座が終わり講師陣たちとの打ち上げの席で、ユーロスペースの堀越社長が耳元で囁いた。「ミニシアターを」作るなら今がチャンスですよ」と。その言葉を真に受けて、翌月には「高知コミュニティシネマ」の実現に向けてレクチャーを受ける

イバラ凱旋トーク」に松尾市長（当時）自らやってきたのだ。「それは素晴らしい活動ですね。また、くわしく話に来てください」と言われた。シネコン建設が決まって市長が交代した現在も、この陳情はきつと現市長に引き継がれていると期待しているのだが…。

■二〇〇四年三月。「高知にコミュニティシネマ（市民映画館）を作る会」の活動も、コミュニティシネマ立ち上げに向けて本格的な準備に入った。会の体制を整えるためにも、コミュニティシネマ支援センターや各方面の支援を受けるためにも、NPO法人格をとることが必要になった。

特定非営利法人NPOの認可を得ること、実は私も知らなかったがこ

ために東京へ飛んだ。金沢シネモンドの成り立ちや、高崎映画祭の活動がコミュニティシネマとして生まれ変わってミニシアターを作る話。それで、もし高知で作るとすれば設立資金はこれくらい…。具体的に話を聞くうちに「ひよっとしたら、できるかもしれない！」と思った。

■東京に通いつつ、高知でも「高知版コミュニティシネマ」を呼びかけ始めたのが二〇〇三年八月。映画が縁で出会い、これまでさまざまな共催活動を行ってきた文化団体や映画の仲間たちが集まって「高知にコミュニティシネマ（市民映画館）を作る会」を立ち上げた。今まで映画上映活動の経験はかなり積んだ。とても素晴らしい仲間たちとの連携した企画も充実してきた。しかし、足りないものはその場所だ。その場所を一緒に作ろうと話し合いが始まった。

そこに行けばいろんな映画が毎日見られる。いろんな文化活動に触れられ、いろんな人がさまざまに集うことができる。お年寄りたちが黄金期の日本映画を楽しんだり、子どもたちと一緒に映写室を探検したり、ワークスペースや資料コーナーもある。おしゃれでくつろげるカフェもあり、映画にちなんだワークショップ

れがなかなか簡単ではない。定款、役員名簿、設立趣意書、事業計画書等々、細かく議論して決めなくてはならないことが山ほどできた。これは結構しんどい会議になるか、と思いきや、不思議といつも楽しく感じる。それはたぶん会議を構成するメンバーの人柄からだろう。映画に限らず、演劇や、こどもの文化や街づくりと、それぞれの分野で長く活動してきた経験や交えながら、「高知版コミュニティシネマ」の実現に向かっていく連帯感の素晴らしさ…。僕にとつて、とても有意義な時間を感じるからだ。

七月と九月には「高知にコミュニティシネマを作る会」主催による上映会と勉強会を開催する。八月には映画上映ネットワーク会議二〇〇四（イン高知）が開催され、そこで僕たちの活動を発表することになった。

■一年先か二年先にはみんなの思いがけない、ミニシアターの座り心地のよい椅子で、一緒に映画を見ることのできたらと思う。コミュニティシネマを高知にもぜひ。

ありみつぶんべい／「高知にコミュニティシネマを作る会」代表・シネマLTG

アイランド音楽に魅せられて

北村 剛

そもそも自分が楽器を演奏するなんて、畑違いなことを始めたのは、自分で作ったガラクタのような楽器で音を出すおもしろさを覚えてからである。自分で作った、世の中に例のないような楽器だから、その演奏方法なんて自分で考え出さなきゃならない。音楽も、その楽器にあった曲を作らないといけない。でもそれは僕にとっては好都合だった。なぜなら、もし高価な楽器を購入して、高いレッスン代を払って、高い教材費をかけたりにしたら、そのプレッシャーでその楽器に触るのもいやになっていたかもしれない。

僕がアイランドの伝統音楽を演奏するようになった一つのきっかけは、不謹慎かもしれないが、やはり楽器が安かったからである。ティン・ホイッスルというアイランドの伝統楽器の縦笛は、僕が最初にアイランドを旅した一九九三年当時、

日本円にして一本三百円ちよつとで買うことができた。これならだめもとで気軽に挑戦してみたくなるでしょ？

もちろん、音楽そのものには旅する前から魅了されていた。その魅力は一言ではなかなか言い表せないが、十年ほど前、そのころ住んでいた東京の、あるラジオ番組で、手づくり楽器や民族楽器をスタジオに持ち込んで演奏しながらパーソナリティーと談話したことがあった。そのとき、ティン・ホイッスルで何曲かアイランドのダンス曲を演奏した。この音楽の魅力は、と聞かれて、「一曲一曲が原色で彩られた絵画のようにキラキラしていて強い個性がある。いつか田舎暮らしを始めたとき、ヘタでも、ちょこっと演奏できたら楽しい音楽だと思う」などと答えた。パーソナリティーには「枯れてますねー、その年で」なんて言われた記

憶があるけれど、実際、五年前から高知に帰り、南国市で畑仕事しながら築百五十年のボロ家で暮らす生活のなか、この等身大の音楽は確かに生活を潤してくれている。

高知でアイランド音楽セッション

アイランド音楽は一人で演奏しても楽しめる音楽だが、やはりその醍醐味は音色の異なる複数の楽器で音を合わせるセッションで味わえる。東京にいたころはアイランド音楽ブームの兆しもあり、定期的にアイランド音楽セッションのあるアイリッシュ・パブもちらほらできていて（現在はそのようなパブがたくさなくてきてすべてを把握できないほ

ど）、たまに足を伸ばしてセッションに参加して楽しんでいたが、高知では、いや、四国レベルでも、アイランド音楽を演奏するという以前に、そのような特定地域の民族音楽は、ほとんど知られていないような状況だった（ただ一つの例外が徳島の北島町創世ホールで、ここでは既に八年前からホール企画のアイランド音楽演奏会が年一回行われている。僕たちのバンド「グレイグース」だ）。

高知に戻ったら、セッションの楽しみはしばらく味わえないだろうと覚悟していたのだが、なんと、高知でも一人もくもくとアイランド音



スケッチの中のジャッキー・デイルー
(1993年アイランド旅行の時に)

高知アイランド音楽の会発定

しかしである。やはりセッションの楽しみは、レパートリーも異なる演奏レベルの高い人と合わせることだ。その点では、毎回同じメンバー数人で、高知で続けていくことに限界を感じていた。だったら自分たちで演奏家を高知に呼んでいっしょにセッションしようという発想が湧いてきた。そんなとき、高知出身の、現在東京でプロとしてアイランド音楽を演奏する坂本健さんから、シアトルのアイランド音楽バンドが日本に来るけど、高知で演奏会やらないかという話があった。そして急ぎよ「高知アイランド音楽の会」を仲間と立ち上げて、第一回のアイランド音楽演奏会を開いたのだった。

アイランド最高のアコーディオン奏者ジャッキー・デイルー登場

そして今年、第五回目となるアイランド音楽演奏会は、なんとアイランド音楽界最高のアコーディオン奏者、ジャッキー・デイルーの登場である。日本初来日であり、高知での演奏が初舞台にもなる。彼はアイランド音楽を代表する人気バンド、「デ・ダナン」、「アーケイディ」、「ボタンズ・アンド・ボーズ」、

「パトリック・ストリート」の中心メンバーとして、常にアイランド音楽をリードしてきた人物である（バンドの紹介や、彼のソロCDなどについては公演のチラシで触れているので、そちらをご参照ください）。これは夢なのだろうか。振り返ってみれば、楽器の手軽さから始めたようなアイランド音楽だったが、知らず知らずのうちにトップクラスの演奏家と、つきつぎにひざを突き合えず距離で演奏を聴けたり、セッションしたりしているのだ。しかも、ここ高知で…。

さらに今回は、開催日十一月二十三日のちよつと一週間前の十六日に、同じ「かるぽーと」でアイリッシュ・ダンスの公演があるという。アイリッシュ・ダンス・ショーでは本国アイランドの「リヴァーダンス」の世界的大ヒットが記憶に新しいが、今回はシカゴのダンス・カンパニーということ。いづれにせよ、一糸乱れぬ技術で、圧倒的な集団ステップダンスを満喫できることだろう。現代的に洗練されたショーとしてのアイリッシュ・ダンスを楽しんだその一週間後には、アイリッシュ・ダンスとは切っても切れないアイランド音楽を、最高の演奏者で体験していただけるという、超豪華メニュー

ー！（夢なら覚めないで…）。

さて、ジャッキー・デイルー演奏会はかるぽーと小ホールでの二回公演（二十三日・二十四日）となっている。すぐ目の前でマイクなしでの演奏を体験していただくのが、この音楽を鑑賞する理想的条件と考えたのだ。そうなるとう然然入場者数も制限されるので、二回公演というかたちを取った。ただし、二回とも同じ内容にはせず、二回続けて聴きに來ていただいても十分楽しめる、というか、二回聴いたら四倍以上（？）楽しめるようなプログラムを考えているので、ファンの方にはお得な二日通し券がおすすめ（僕たち高知のアイランド音楽バンド「グレイグース」もどちらかに出演する予定）。

今回のジャッキー・デイルーという大御所の初来日コンサートは、彼との親交も深い守安功・雅子夫妻により実現した。守安夫妻はアイランド現地でも評価の高いアイランド音楽演奏家であり、研究者でもある。演奏会では、演奏はもちろん、ジャッキー・デイルーと会場の皆さんをつなぐ解説者としてもサポートしていただく予定だ。乞う御期待！（きたむらつよし／高知アイランド音楽の会代表）

※パブ・アモンティラード（高知市帯屋町1丁目1-17）での9月のセッションは30日（木）20時半ごろから。アイランドから帰ったばかりの守安夫妻を特別ゲストに迎えます。詳しくはアモンティラード（電話875-0599）へ。

アイランドの風景

高知の宝物―美しい自然と美しい人々

高知の平和資料館・草の家にきて二年がたった。新しいところに対する好奇心の強い私は当然旅行が好き

私が惚れた土佐人 ― 榎村 浩 ―

金 英 丸

また、美しい自然と共に生きる高知の人々も自然と似ていて何より美しい。路面電車に乗ると知らない人とも気楽に話ができる街の風景は、どんどんなくなっていく日本社会の原風景であるだろう。高知の友だちと夜遅くまでお酒を飲んで最後に屋台でラーメンを食べていると、海に向こうのふるさとの懐かしい風景を思い出す。実は、韓国のある街の夜の風景は、ほとんど違いがないくらい高知とよく似ている。

私が惚れた土佐人―榎村浩

私が高知にきてから初めて出合い、惚れてしまった一人を紹介したい。高知にくる前、大阪で在日朝鮮人の民族教育に取り組んでいる在日運動家に高知へ行くことを伝えた。そうしたら彼が「間島バルチザンの歌」を書いた反戦詩人・榎村浩（マキムラコウ）が高知の出身だということを教えてくれた。

そのとき、はじめて耳にした「榎村浩」と「間島バルチザンの歌」。

間島が、日本帝国主義と戦った抗日バルチザンの主な舞台であったのは以前から知っていた。間島は、その時代に朝鮮半島から移住した朝鮮民族が、いまも数多く住んでいる土地でもある。しかし、「榎村浩」と

「間島バルチザンの歌」は聞いたことがなかった。

高知へきて榎村浩の研究や榎村浩詩集の出版などを、西森茂夫館長を中心に平和資料館・草の家がやってきたこと、榎村浩が草の家の隣にある第六小学校へ通ったことを知って不思議な縁を感じた。

草の家には榎村浩が小学生のころ書いた作品が載せられている当時の文集がある。「大正十三年一月二十六日」に発行されたガリ版刷りの「高知市第六小学校児童文集・蕾」には、吉田豊道という本名で書いた詩数編が掲載されている。また、彼が「間島バルチザンの歌」を最初に発表した一九三二年四月の「プロレタリア文学」臨時増刊号も所蔵している。発表当時の詩は、戦争に走っていた帝国主義当局の検閲によって作品のあちこちが部分的に「×××」「××」と削られている。

榎村浩は一九二一年高知市廿代町に生まれた。本名は吉田豊道。いまのひろめ市場があるひろめ屋敷で育った彼は、子どものころから天才的な才能を発揮する作品を相次ぎ発表、「神童」と呼ばれた。

榎村浩は、一九三一年の「満州事変」をきっかけに日本がアジア侵略を本格化することを痛烈に批判する

反戦詩、「間島バルチザンの歌」を発表、大きな反響を呼んだ。決死の反戦活動を展開した彼は、いまの高知大学にあった朝倉の歩兵第四十四連帯の兵営に「銃を後ろに向ける！敵と味方を間違えるな」と書いた反戦ビラをまき、悪名高い治安維持法違反で逮捕された。投獄後、天皇制特高警察による過酷な拷問にも屈せず非転向を貫いた彼は、拷問のため重症釈放されたが、一九三八年、わずか二十六歳の短い人生を終えた。

榎村浩が投獄され、ひどい拷問を受けた高知刑務所跡地にできた城西公園には、代表作「間島バルチザンの歌」が書かれた詩碑が、平和町には榎村浩と母のお墓がある。

東アジア市民連帯の原型―榎村浩

先月には韓国京仁（キョンイン）放送の撮影陣が、アジアの平和主義者榎村浩を顕彰する八月十五日の特集番組を撮影するため草の家を訪れた。

戦争に走る時代、戦争に走る社会で「反戦」を叫ぶ尊い抵抗精神、ひどい拷問にも屈せず最後まで自分の意志を貫いた土佐人榎村浩から東アジア市民連帯の原型を見る。

（きむよんふあん／平和資料館・草の家事務局長）

高知市文化プラザ かるぽーと 7月の事業のご報告

◆「第三回詩のボクシング高知大会」

七月十一日、今年で第三回を迎える「詩のボクシング高知大会」が開催されました。「詩のボクシング」は、二人の対戦者＝朗読ボクサーがリングの上でオリジナルの詩を朗読し、いかに観客を惹きつけたかを競う「言葉の格闘技」です。

本大会に先立ち、六月五日に行われた予選会には、県下の五市四町二村から二十八人が参加。年齢層も十五歳から六十五歳までと幅広く、特に今年は高校生の参加者が目立ちました。この中から本大会に出場する十六人が選ばれました。

朗読ボクサーにとって短くも長いリングの上の三分間。その中で語られるそれぞれの言葉に込められた強い思いは直に観客に伝わり、会場も大変な盛り上がりを見せました。

激戦の中、今年も、第一回、第二回ともに惜しくも準優勝だった《高瀬草ノ介》選手が《五台山のめろね

こちゃん》選手を制し、ついにチャンピオンの座に輝きました。新チャンピオン高瀬草ノ介選手は、十月九日に東京で開催される「第四回全国大会」に高知代表として参加します。

◆「声で遊ぼう！小学生詩のボクシング」

子どもたちに日常生活の中でさまざまな文化を体験してもらう「高知市文化体験プログラム支援事業」の一つとして、七月二十九日、「小学生詩のボクシング」を開催しました。小学生を対象に初めて開催した「詩のボクシング」は、自分で詩や文を作って声に出すことで、コミュニケーションの仕方や言葉による自己表現を学んでもらおうとするもので、小学校一年生から六年生までの十六人が参加しました。

まずは、日本朗読ボクシング協会代表の桶かつのりさんが、子どもたちが発表した作文や詩について、一緒に話し合いながら指導を行いました。



優勝した二人だけでなく、子どもたちは皆予想以上の感性や表現力を発揮。子どもたちにとっても、また観客として参加した保護者にとっても新鮮な体験になったことと思います。

◆「高知市文化プラザ公開講座」

高知市文化プラザでは、財団法人

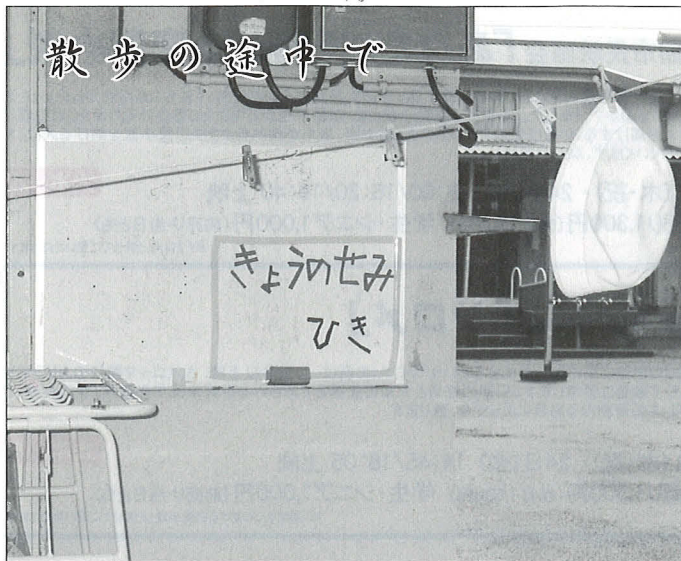
地域創造の助成を受け、先進的な芸術文化の拠点として、文化プラザの一層の活性化を図ろうとする「高知市文化プラザ活性化計画策定事業」に取り組んでいます。

この事業の一環として、七月三日と七月二十日に高知市文化プラザ公開講座を開催しました。一回目は「公立文化施設の事業評価を考える―新しい評価軸の導入について―」と題して静岡文化芸術大学文化政策学部伊藤裕夫教授に、二回目は「公立文化施設におけるこれからの事業企画―市民参加をキーワードに―」と題して京都橘女子大学文化政策学部小暮宣雄助教授にお越しいただき、地域における文化施設のあり方や、その事業企画、事業評価について、全国の事例を交えてご講演いただきました。

講座には、活性化計画の策定委員をはじめ、文化施設関係者や、文化行政に関心を持つ市民の方など、各回約四十名が参加。現在の文化施設の課題や、指定管理者制度などについて、活発な質疑応答や意見交換が行われました。

いただいたご意見を取り入れながら、各分野の計画策定委員の討議を経て、今秋十月には計画案をまとめる予定です。

散歩の途中で



夏の終わりの保育園。壁に掛けられたホワイトボード。この夏、ずいぶん活躍したことだろう。大人たちは、今日の天気、今日の最高気温、今日の運勢、今日のニュース、今日の株価、今日の金メダル……なんてことはかり気にかけていたけれど、子どもにとっては、これがいちばん大切なことだったんだよね。

風伯

つゆのみながら

高知の本屋さんを探したがなぜか一冊も目に留まらなかった。そこで本の紹介をするつもりはないが、二人の精神が、人間の心の本質に触れているような気がして、こんな騒がしく殺伐とした世だからこそ多くの人に読んでもらいたいと思った。実は柳澤さんは原因不明の難病に侵され

本を読んで久しぶりに心が震えてしまった。「露の身ながら」集英社二〇〇四年四月刊。遺伝学者の柳澤桂子と免疫学者の多田富雄の二人の往復書簡の形式になっている。著名なお二人の著書をご存知の方も多いかもしれないが、最近友人に勧められて

高知市文化振興事業団の本

高知のESPRIT

—ふるさとの未来を考える—



A5判・160頁 本体価格1165円

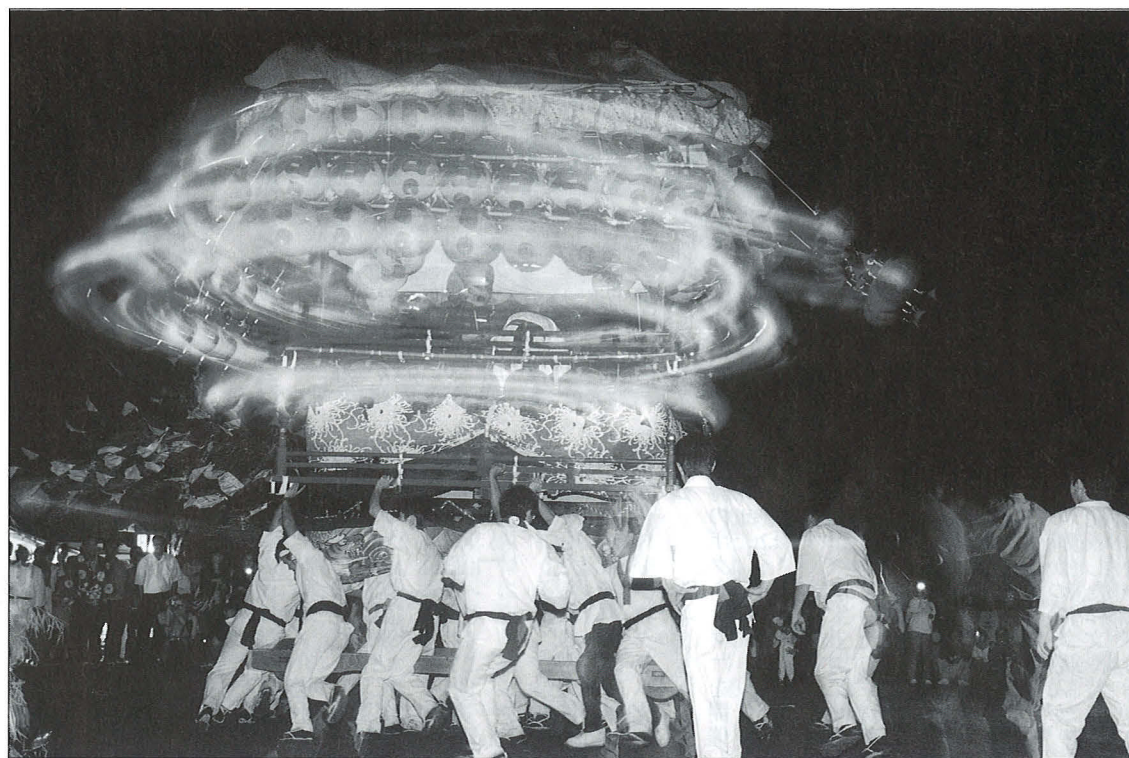
高知市文化振興事業団の機関誌「文化高知」は1984年9月に創刊してから、満20年を迎えました。創刊以来、この巻頭ページには、県内オピニオン・リーダーの方々に、それぞれの視点で高知をとらえ、ふるさとへの熱い思いを語り、今後の在り方を提言する一文をお寄せいただいています。

『高知のESPRIT』には創刊号から50号までの巻頭文を収録。当時の展望どおり実現した夢、いまだ達成されていない課題、変貌を遂げた街並、変わらない思い……今いちど振り返ってみませんか。

今号の表紙

「神戸の二人」 山本啓三

高知市にもし、お城がなければ周辺はのっぺらな市街であろう。その昔、城をのぞむ通りには手入れのいきとどいた榎木が白壁に映え、わきの溝は清く露草が流れとたわむれる。そんな美しい町並が想像される。昔の人が現在にタイムスリップをしたならば馬は追手筋あたりのせんだんの並木につなぐだろうか。フンの始末は。(やまもとけいぞう)



高知を撮る

第20回写真コンテスト入賞作品

御田祭 (平成15年 室戸市吉良川町)

下元 将司

今年に入って、ほんの数か月の間に、「早期英語教育」に関する話題が、新聞の紙面をにぎわした。

まず、本年初頭に、河村建夫文部科学相が、全国の小学校で、英語を教科として必修化することに、前向きな姿勢を表明。

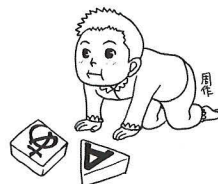
三月初めには、中央教育審議会に専門グループを設けて、一年後をめどに基本的な方向を示すように求める——と発表された。

ついで、三月下旬には、台湾の教育当局が、「全人格の発展を阻害する」という理由で、幼稚園での英語教育を全面的に規制することになった——と報じられた。

さらに、四月初め、「幼児英語教室が人気」という大見出しで、この種の教室が大繁盛——というニュース。

〈早期英語教育〉については、賛

早期英語教育



風俗歳時記

否両論があるろうが、市川力「英語を子どもに教えるな」、齋藤孝・斎藤孝史「日本語力と英語力」の著者らははじめ英語教育・日本語教育の専門家たちは、否定論を唱えている。

否定論者の代表として、『文藝春秋』の本年五月号に、「日本語があぶない」と題して、特別寄稿をしている、作家・丸谷才一氏の結論を紹介する。

「いまやるべきは、ゆとり教育を即刻やめて、日本語の時間を増やすこと、小学校、中学校で日本語教育を徹底的にやること。それで日本語の読み書きの能力が増せば、ほかの課目だって自ずから力がつく。本を読み、文章を書く力がつけば、それによってほかの本だって読める。そのために時間数が足りないなら、土曜日を休みにすることを廃止しても日本語教育に力を入れなきゃならないと僕は思う。」(朴)



第144回市民映画会「あなたにも書ける恋愛小説」

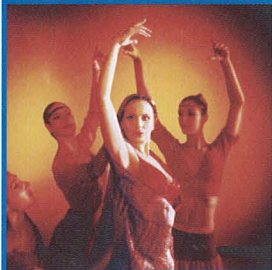
女性なら誰でも一度は読んだことのある恋愛小説。小説で描かれる恋に憧れ、「私もこんな恋がしたい」と思ったこと、ありませんか? 「あなたにも書ける恋愛小説」は、恋愛小説がどのように書かれるのかを、恋の成功実例をつけてお届けする、いわば恋のテキストのようなお話。誰もが憧れるような恋愛小説を紡げる人は、ホントの恋もうまくいくはず、なんです…。

9月23日(木・祝)・24日(金) 13:00/16:20/19:40 上映

大ホール

一般前売り1,300円(当日1,500円) 学生・シニア1,000円(前売り当日とも)

※「サロメ」と併せてご覧いただけます。



第144回市民映画会「サロメ」

若い娘が踊りの褒美に男の首を要求するという「サロメ」の話は、二千年以上昔、古代ローマ時代のガリラヤ地方の逸話として聖書に登場します。幻想の怪奇と文章の豊穡さで知られる世紀末文学の傑作「サロメ」が、フラメンコとバレエの華麗なる融合によって今、甦ります。

9月23日(木・祝)・24日(金) 14:45/18:05 上映

大ホール

一般前売り1,300円(当日1,500円) 学生・シニア1,000円(前売り当日とも)

※「あなたにも書ける恋愛小説」と併せてご覧いただけます。



バーデン市立劇場 オペラ「コシ・ファン・トゥッテ」

モーツァルトの4大オペラのひとつと称され、多くの人から愛される名作オペラ「コシ・ファン・トゥッテ」を、ヨーロッパのオペラ・オベレッタの首都と言われるバーデン市立劇場よりお届けします。1700年代後半のナポリを舞台に、若い士官2人と、その恋人である姉妹を中心に、男女の関係をユーモラスに描いた作品をお楽しみ下さい。

9月29日(水) 18:00開場 18:30開演

大ホール

S席9,000円 A席8,000円 第2バルコニー席 売切れ 第3バルコニー席4,000円 第4バルコニー席3,000円



高知のアーティスト2004「もっくんバード」

県内で活動するアーティストによるシリーズプログラム、「高知のアーティスト2004」の第2弾として、1996年9月に結成された、高知県内では初めてのマリンバアンサンブルグループ、「もっくんバード」コンサートを開催します。マリンバの魅力を最大限に引き出す演奏に、ピアノ・ドラムが加わった楽しいステージをお楽しみ下さい。

10月22日(金) 18:30開場 19:00開演

小ホール

全席自由 1,500円



アイリッシュ・ダンス・カンパニー「トリニティ」

1987年アイルランドで行われた世界アイリッシュ・ダンス・コンクールでアメリカの団体として初めて優勝したのを始め、現在まで実に18度世界タイトルを獲得した、世界最高のアイリッシュ・ダンス・カンパニー、トリニティ。肉体の限界に挑み、ダンスの本質を極めるステージをお楽しみ下さい。

11月16日(火) 18:30開場 19:00開演

大ホール

S席6,500円 A席5,500円 第2バルコニー席4,500円 第3バルコニー席3,000円 第4バルコニー席2,000円



アイリッシュ・アコーディオンの真髄「ジャッキー・デイリー」

「デ・ダナン」、「アーケイディー」、「ボタンズ・アンド・ボーズ」、「パトリック・ストリート」など、アイルランド音楽を代表する名バンドの中心メンバーとして、常にアイルランドの音楽をリードする、最高のアコーディオン奏者、ジャッキー・デイリー。待望の日本初公演です。※各日違った内容のステージをお届けします。

11月23日(火)・24日(水) 18:30開場 19:00開演

小ホール

全席自由 前売り2,800円(当日3,000円) 2日通し券5,000円



高知市文化プラザ

かるぽーと

お問い合わせ:088-883-5071

電話予約:088-883-5073

〒780-8529 高知市九反田2-1 <http://www.bunkaplaza.or.jp>